

---

# お兄ちゃんが、スキ。

華慕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お兄ちゃんが、スキ。

### 【Nコード】

N7483K

### 【作者名】

華慕

### 【あらすじ】

友達のお兄ちゃんを好きになった。  
その友達もお兄ちゃんが好きだった。

どうしてこんな複雑な恋になってしまったんだろう？

**(前書き)**

初投稿になります。

投稿の仕方が分からなくて何度か投稿してすぐ消してしまいました；

；

すいません。

稚拙な文章ですがよろしければ・

「お兄ちゃんの事が好きなの」

私はこれまでに何度この言葉を聞いただろう。  
むしろ聞かない日は無いというくらいにこの言葉は私に発せられる。  
その言葉を言う事で、彼女はその好きという気持ちをより濃くなぞ  
っているようだ。

「もう、分かったって」

「ねえねえ、ひなの話ちゃんと聞いてないでしょ。直ちゃんのばか  
ばか呼ばわりされた私は浅井直。」

そして自分をひなと呼ぶ彼女は倉木雛子。

少し怒った表情の雛子は、綺麗な長い髪を指に絡ませて大きくて猫  
のような目を少し釣り上げている。童顔で小柄な彼女は同じ年でも  
私より幼く見える。

甘く、かわいい声で雛子は私に向かって話を続ける。

「お兄ちゃん以上にかっこよくて優しくてかっこいい人は絶対いな  
いんだから。昨日だってね・・・」

「うん。かっこいいって2回言ったけど」

「大事な事だからもっかい言ったの」  
気にせず雛子はお兄ちゃんの事を嬉しそうに話始める。煩いほどに  
雛子は”お兄ちゃん”の事を口にするけど、私も慣れてしまったの  
か雛子は人懐っこく、特に私に懐いているせいもあって、最初の頃  
は驚いたけど今では特に気にならなくなってしまった。

雛子はかなりのお兄ちゃんが好きな言わゆるブラコンだ。だけども見た目がかなり可愛いらしいだけにそうゆうところも愛くるしく思えてしまう。

私達が通う高校は女子高で、当然だけど女しかない。必然と恋話ばかりが多くなる。違っにしても異性に感しての話題が殆どを占めている。

だけど雛子は恋話にしるなんにしる、口から出てくるのはお兄ちゃんのことばかりだった。

クラスの子が雛子に

「お兄ちゃんってかっこいいんでしょ？写メとか見せてよ」と言つと

「お兄ちゃんを見て好きになっちゃったら困るから絶対駄目」という徹底ぶりだった。

私たちは小等部から高等部まであるわりかし大きな規模のこの学校で、ずっと一緒にクラスだった。話の大半を占める恋話も、私はそういう話には疎かったし、元々の性格もあってか女子高特有のノリについていくのに疲れていた。

かわいくて女の子らしい雛子とは全く別のタイプだけどお兄ちゃん以外に特に興味を持たない雛子と私は、不思議なくらいに仲良くなれた。

だけど、私はこのお兄ちゃんに恋をしてしまったのだ。

付き合いが長いからか、雛子が私を女の子として見ていないからか、

私にお兄ちゃんを見られたり会わせたりするのは気にしないようだった。

雛子の絶賛するかつこいいお兄ちゃんは、雛子とはあまり似ていない涼しげな顔立ちの柔らかな雰囲気の人で、私はいつの間にかこのお兄ちゃんに恋をしてしまった。

ある日、雛子の家に遊びに行った帰り、遅いからとお兄ちゃんが私を送ってくれた。

「ひながいないで、二人で話す事ってなかったよね」

お兄ちゃんが優しく微笑む。私は今のお兄ちゃんの言葉で、もしかしたらこれは数少ないチャンスなのかもしれないと思った。

告白するなら今しかない・・・！！

私は歩く足を止めた。お兄ちゃんも不思議そうに立ち止まる。

「直ちゃん・・・？」

「お兄ちゃん私、実はずっと・・・」

ずっと好きなんです。と言う言葉を言おう、吐き出してしまうおうとした瞬間、

「2人とも何してるの？」

甘く可愛らしい声、振り返ると私たちの後ろには雛子が立っていた。

「直ちゃん、忘れ物したから慌てて追いかけたの。ほら、ケータイ忘れるなんて慌てんぼお」

私のケータイを持っていたずらに微笑む雛子。

足音は聞こえなかったはずだ。ずっと雛子について来ていたのだから。そしたら、さっきのお兄ちゃんへ告白しようとしたのは気付かれていないだろうか・・・

雛子は私にケータイを渡すと、耳元で小さく

「ひなは、お兄ちゃんの事が好きなの」と囁いた。雛子からは聞い

た事がないような低い声だった。「お兄ちゃん、早く直ちゃん送ってこつ。お家の人心配しちゃうよお」  
今の声が嘘のように、天真爛漫な笑顔で雛子はお兄ちゃんに腕を絡めた・・・私に見せ付けるように。

その日から雛子は私の事を完全にライバル視するようになってしまった。

不仲になったというわけではなく、基本的には変わらないのだがお兄ちゃん絡みの事には全てだ。

「昨日ねえ、ひなお兄ちゃんと寝たの」

「ぶっ・・・寝っ・・・!？」

私は丁度昼休みで飲んでいたイチゴオレを吹き出しそうになった。

「心霊特集みたいな番組あったでしょ？あれ見てたら怖くなっちゃって、寝れないからお兄ちゃんの布団勝手に入って寝ちゃった。一緒に寝るとか久しぶりだったからしあわせ」

うつとりと話す雛子の言葉に安堵するも、最近雛子が私に対して話す事に、悪意を感じる。

今私たち二人がいるのは校舎端の、人通りのほとんどない階段。ここでお昼をしようと言った雛子は、私に何か大事な事を言うつもりではなかったのだろうか？

イチゴオレが無くなって、私は雛子に今まであえて聞かなかった事を質問した。

「お兄ちゃんを好きなのは恋愛感情なの？」

ガリッとゆう雛子が舐めていた飴を噛む音がした。

「そんなの決まってるじゃん。ひなはちっちゃい頃からお兄ちゃんのお嫁さんになるのが夢だったの。お兄ちゃんが一番好きなのはひなだもん」

屈託なく微笑む雛子。そして

「ねえ、直ちゃん。今日お兄ちゃんに二人で告白しよう。どっちをお兄ちゃんが好きか決めてもらおう？」

「ええ!？」

一度はしかけた告白だけど、そんないきなり二人で告白なんて。

「無理って言ったらひなこの階段から転がり落ちるから。直ちゃんが突き飛ばしたって事にするから」悪魔がいた。雛子は本気なのだろう。

「もうすぐ昼休み終わっちゃうね。教室戻る」

雛子は立ち上がって私の手を引いた。

雛子の家の近くにある、ブランコとジャングルジムとベンチしかない小さな公園。

空は茜色で、雛子と私はブランコに座って学校帰りのお兄ちゃんが来るのを待っていた。

ほんとに告白しなくてはいけないのだろうか・・・？雛子が告白してお兄ちゃんは困らないんだろうか？

頭の中がごちゃごちゃの私に、雛子の「お兄ちゃん!」

と言っ声がしてはっとすると、お兄ちゃんが雛子に呼び止められていた。

「二人とも何してるの」



「お兄ちゃんに話したい事があって待ってたの」

「俺に？ひなと直ちゃんが？」

お兄ちゃんが私の方を見て、なんとはいいいのか分からずに頷く。

渋る私を雛子がブランコから引つ張り、お兄ちゃんの前に二人で立った。

「なに？」

「ひな、ずっと前からお兄ちゃんに言いたかったの。お兄ちゃんも同じ気持ちだったら嬉しいな・・・」

緊張と静寂が包む公園の中、雛子はその先の言葉を続ける。

「お兄ちゃんが好きなの・・・直ちゃんは」

・・・ん？

お兄ちゃんが好きと言う雛子が何度となく発する言葉。聞き間違えることは無い、はず。今、なんて言った？私のことを告白したんだよね？

「え？」

驚くお兄ちゃんに雛子は

「だからあ、直ちゃんはお兄ちゃんの事が好きなんだよ。」  
と、もう一度伝える。

「雛子っ。なんで私の事・・・」  
なんで自分じゃなくて私の告白をするのだろう。お兄ちゃんが好きなのに。

雛子は私を見ると、微笑んで

「私が恋愛感情でお兄ちゃんを好きって言ってないでしょ？直ちゃんもお兄ちゃんもひなから見てすぐ分かるのに、ひなが言わなきゃ進まなそうだもん」

私が啞然としていると、ひらりとその場から過ぎていった。

振り向かず私とお兄ちゃんに

「ひな疲れちゃった。お兄ちゃん、直ちゃん送って行ってあげてね。もう付いていかないから」  
そう言って帰っていった。

気まずい私に、お兄ちゃんが困ったように微笑む。

「ひなの奴、いきなりすぎて驚いたよ」

「あの・私、」  
やっぱり自分の口から告白しよう。もう、雛子が言ってしまったから振られても怖くないと思えた。  
お兄ちゃんを見ると夕焼けのせいではなく、顔が少し赤く染まっていた。困ったような表情のまま  
「さつき、ひなが言った事はほんと？」  
と私に聞いた。

頷くと、

「ずっと言えなかったんだ。雛子が直ちゃんの事を好きだっついても俺に言ってたから。妹の大切な友達だし・先に言うね、直ちゃんが好きです。付き合ってくれませんか？」  
驚いた。私を好きって雛子が好きなお兄ちゃんに言ってたんだ。や  
やこしい。

「私もお兄ちゃんが好き、です」

「お兄ちゃんはひな限定かな。これからは名前で呼んでくれる？」  
照れくさそうに言うお兄ちゃん。そうか、雛子が好きなのは「お兄ちゃん」なんだ。きつとお兄ちゃんも雛子が好きなんだ。

お兄ちゃんと呼べないのは少し残念だけど、私は初めて大好きな人の名前を口にした。

\*\*\*\*\*

直ちゃんとお兄ちゃんを公園に置いて、家に帰ると、部屋のベッドに倒れこんだ。

正直言うとお兄ちゃんを好きなのは恋愛感情だったのかもしれない。でも自分はそれ以上に直ちゃんを好きだったんだね。お兄ちゃんを誰かに盗られるのは嫌だったけど、直ちゃんが盗られるのも嫌だったの。

大好きなお兄ちゃん。男の人としてなら直ちゃんにはあげてもいいかな。

お兄ちゃんはひなのだから。ひなはお兄ちゃんの妹でいたいし。

そう考えるとやっぱり、ひなが一番好きなのは直ちゃんだったのかな。

「失恋かあ、」

今ごろ二人は、手を繋いで帰っているだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7483k/>

---

お兄ちゃんが、スキ。

2010年10月8日14時59分発行